

ムーメンメモリア・ロストノイズ
三話・陽の射す王宮の影

雨和七瀬

ルークとユノがブランカを連れ、数日かけて王都までたどり着いた。

「ここが城下町……パツと見ただけで、宿場町より人がたくさん居る！」

ブランカは店の看板や花壇などあちこちに視線を取られ、ふらふらと街路を歩く。城下町の住民はそんな彼女を慣れた動きで避けて歩く。

「おい、あんま離れんなよお。……はは、聞こえてねえや」

ユノはルークと話す中でもブランカを見失わないようにずっとブランカの後ろ姿を眺めていた。そこでルークはユノにブランカを任せることにした。

「俺は陛下に報告書を持って行く。少し時間がかかるから、ブランカに町を案内するなり、好きにしてくれ」

ユノは一瞬キョトンとしたが、すぐに意味を理解し、「おう、任せな！」と威勢よく返事をしたかと思えば、こちらにも慣れた足取りで人の波を掻き分けてブランカを追いかけていった。

「……はあ。行くか」

ルークは外套の頭巾を深く被り直すと、重い足を無理やり前に出し、真つすぐ王宮へと向かった。

城門の前まで来ると、強面の門番のせいか人はまばらになる。周りを見渡し、頭巾を取る。すると門番の顔つきが変わった。ルークはここからは早く用事を済ませるために早足で城門を潜りつつ、門番に軽く会釈をする。

目を合わせた方の門番が胸に手を当て、敬礼すると、もう一人の若い門番もそれに合わせて敬礼をするが、ルークは既に居館の扉の方へ向かっていた。

「あの方って、ラクドリン様の……？」

若い門番がもう一人に問いかけると、強面の門番はひそひそと答える。

「……あまり触れるな、色んな所から嫌われるぞ」

ルークはなるべく人気の少ない場所を選び、ひとまずは自分にあてがわれた研究室に逃げ込むように入り、息を整える。

「……ふう」

魔法道具が整理されて収納してある戸棚、読み古したものから最新の研究が書かれた物まで揃っている本棚。彼にとつて一番落ち着く場所は彼を温かく迎えた。ルークは鞆を床に降ろし、外套と上着を椅子の背もたれにかけ、仮眠用の寝台に腰を降ろし、そのままゆっくりと横

になった。ルークは全身の力を抜く。微睡む訳でもなく、かといって何か思案するでもなく、ささやかな一人だけの時間を享受した。

少し疲れが取れたらルークはそつと起き上がり、床に放られた鞆から今回の調査結果をまとめた報告書を取り出す。

(この時間なら、陛下は執務室にいらっしやるはず)

ルークは上着と外套を着直して、扉の前に立つ。出るタイミングもまた、呼吸を整える。そして意を決して部屋を後にした。

国王の執務室に向かうとなると、通る道の選択肢も少ない。人通りのある廊下をつかつかと歩いていく。侍従、兵士、近衛、あらゆる城の人間は彼を見て、様々な反応を示す。ひそひそと話し始める者、目で追う者、逆に目を逸らす者……。そのどれもが、彼の胸の内に小さなささくれを作る。気にしないように、そう思っている、彼の足は早まる。

執務室の前は近衛によって無駄な人の往来は排除されていた。

「ルーク殿。調査の報告でしょうか」

近衛兵の問いかけに、ルークは頷く。

「陛下は『待ち遠しい』とおっしゃって、わざわざ時間を取って居られます。お入りください」

ルークはもう一度頷くと、近衛が開けた戸の奥へ進んだ。最奥の書齋机に置いてある小物を指で弄っていた若き国王は、ルークの来訪に気付くと微笑みを見せ、肘をついたまま手を振った。

「ルーク、待ってたよ。今回はどう？」

いつものように、王はルークが挨拶をする前に話を進める。ルークは形式通りの挨拶を諦めて敬礼をするだけに済ませると、報告書を国王に渡した。王はそれを受け取るとパラパラと目を通し、またルークの方を見る。これは「概要を話せ」ということであるというのも、ルークは重々理解していた。

『異物』に関しては普段と同じように一部が魔物化していました。今回は、異物の魔物が人間を襲っていたところを魔法で討伐しました」

王は「へえ」と相槌を打つ。その声色から、ルークは詳細を思い出して話す。

「森の奥で見慣れない服装の少女が異物の魔物に囲まれていたのを護衛が発見し、武器を持って異物の魔物と善戦していたことから誘導が可能と判断し、退避させて私の魔法で焼き払いました」

王は表情を真剣なものに切り替える。

「武器？ その子は銃が使えるのかい？」

「いえ、見慣れない武器でした。槍のようにも、細長い剣のようにも見える形状の物です」

王は報告書をめくり、ブランカが持っていた武器の素描が書かれた頁を見る。細長い棒に二つの輪が正体不明の力で触れずに固定されているのをルークが絵に起こしたが、見返すと想像で書いたとしか思えない絵であった。しかし王は真剣にその武器の絵を見つめる。

「この武器で、ブラン……少女が魔物化した固化泥石を切断するのを見ました」

王は目を見開く。その瞳に陽の光すら取り込まれて、輝いていた。

「異物の魔物を切れる武器！ 僕たちが最も欲していた、異物の魔物への対抗手段！ どういった代物なんだい？」

ルークは渋い顔で首を横に振る。

「持ち主の少女が記憶を失っていたため、詳細は一切不明です」

「その子は今どこに!？」

王は立ち上がり、ルークに詰め寄る。

「護衛の提案で保護しています。今は二人で城下町に居るでしょう」

ルークは内心ユノの判断に感謝しつつ、表面上は冷静に答えた。王は表情を緩ませ、ルークの肩を掴んでいた手を離れた。

「ああ良かった、ルークなら『そのまま別れました』とかやりそうだったし」

ルークは凶星を突かれて肩がすくんだが、ここで目を逸らすと絶対に説教が始まると思ったルークはうっかり目を逸らしてしまわないよう、あえて目を閉じた。しかしそれも王の輦轡を買うには十分な反応だった。

「ほらな。もう、君はもう少し人に価値を見出すべきだ」

王は机から離れ、執務室の中を歩き始める。王が長話を始める合図だ。

「いいかい、僕は君が他人を簡単に信用しないのは知っている。その氣質が僕には無いが故に、君の意見には僕自身のものと同等の価値があると思っている。でも、それで価値のあるものを取りこぼされるのはいただけない」
今回は本当に長くなる、とルークは判断し、姿勢をこつそりと緩める。

「護衛に就いたのがファルエル君で良かったよ、彼女は僕と意見が合いやすい。その上銃を扱えるから異物の魔物に対抗するためにも必要な人材だが、君とも相性が良いみたいだ。幼馴染、っていうのも大きいのかな」

王は楽しそうに話すが、ルークは気が気でなかった。

「……ルーク。僕も当然、その女の子が持つ武器には調べる価値があると思っている。でもそれと同時に、その子自身の記憶、過去もまた、調べる価値があるとも思う。僕たちがいちいち調べなくても、彼女が記憶を取り戻せば彼女から話を聞くだけで済む」

さすがに我慢できず、ルークは口を挟む。

「しかし、彼女は信頼に値する人物とは言えません」

「言うと思った」

「ピシヤリと言葉を返される。

「君には僕の右腕としてもっと修行してもらわないといけない。今も十分優秀ではあるけど、伸びしろがあれば伸ばすのが、僕の君に対する『責任』だ。次の仕事はこうしよう……」

ルークは嫌な予感を覚えた。次の言葉が飛ぶ前に身構える。しかしルークに拒否権は無い。

「異物の魔物を切れる少女と信頼関係を築き、あらゆる視点から情報を引き出してほしい」

ルークに対して言うのであれば、無茶な要求である。当然、ルークは顔をしかめた。苦し紛れにルークは進言する。

「ユノを補佐に置いてもよろしいでしょうか」

それを聞いた王もあからさまに嫌そうな顔をする。

「え〜……彼女には魔物の討伐を頼もうと思ったんだけど」

「実地調査としてブランカも討伐に参加させれば……あ
ルークはブランカと名付けたことを伏せていたが、口を滑らせてしまったことに気付き、口元を押さえる。

「ブランカって名前なんだ？」

王は満面の笑みを浮かべる。

「か、仮称としてユノが名付けました……」

「そんな洒落た名前、彼女一人じゃ思いつかない気がするけど？」

ルークの耳が若干赤くなったのを見た王は更に明るい表情を見せる。

「そうかあ……うんうん、『ファルエル君が』その子を気にかけているのがひしひしと伝わるね。ファルエル君とブランカを引き離すのはかわいそうだねえ。仕方ないなあ、彼女の仕事の手伝いもついでにお願いしようかな」

まるでこの成長を喜ぶ親のような声色で畳みかけられ、ルークは珍しくその場をすぐにでも離れた気分だった。

「じゃあ、三人で国中の『異物の魔物』の討伐を通して武器の性質を調査しながら、ブランカと仲良くなつて身の上を調べてきてね。……これで僕と君の要求は擦り合わせられたでしょ」

同じ笑みではあるが、有無を言わさないという圧を感じるものであった。

「仰せのままに。それでは失礼いたします」

ルークは踵を返し、足早に執務室を後にした。

「……いい報せを待ってるよ、ルーク」

王はその背を優しく見守っていた。

〈四話へ続く〉